

アフガニスタン
に於ける 玄奘三藏旅程の註解

極東フランス學院は、創刊の年一九〇一年に、健駄邏 Gandhara の古代地理に關する註解(玄奘三藏西域記の一章に關する評註)を掲げて、印度及び支那に關する事柄は何事によらず同紙の興味を喚起することを明示した。此の註解は、玄奘法師が現在の英領印度に到着した時に筆を起し、ペシヤワール Peshawar 地方遍歴の跡を辿らうと努めたものであるが、其の當時には、今のアフガニスタンに當る地方に着いた後法師がどの道を通つて其の敬虔な旅行を續けたものか、その道筋をさう俄に前よりもずつと明かにすることが出来ようとは誰も考へてゐなかつた。何故かと云ふと、曾てはバーンス Burnes、マツソン Masson、フリエ Ferrier などのやうな各國旅行家の跋涉した Emir(都督)の領土も、半ばは強大な隣邦に對する當然の疑心に因り、半ばは又その鎖國が結局英國政策上の便宜にも適ふといふ譯で、外交團に屬する以外の外國人に對しては再び禁斷の地域となり、入國を嚴禁された考古學者などは、露領及び支